

(第 1 回 午前)

2025(令和 7)年度入学試験問題

国 語

(試験時間：50 分)

《注 意》

- (1) 問題は ～ まであります。
- (2) 解答はすべて解答用紙に書いてください。
- (3) 受験番号、氏名を忘れずに書いてください。
- (4) 解答用紙のみ回収します。
- (5) 解答に際して、句読点、符号などが含まれる場合には一字分として数えます。

城 西 大 学 附 属

城 西 中 学 校

一 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

皆さんは、なるべくたくさんの本を読みたいと思うかもしれない。これは、「広く」読むということ。A、それは素晴らしいことです。でも、その一方で「深く」読むことも忘れないでほしいのです。

①「深く」読める本に出会わないと「深く」読むことは始まりません。ここという「深く」読むとは一年程度では読み終えることができない本のことです。読めば読むほど謎が深まるような、読めば読むほど意味が深まっていくような本のことです。

どんどん読める、これも読書の楽しみの一つです。B、今の私には※がたたない、まったく太刀打ちできない、そんな本にも出会ってほしい。そうしたことが起こるのは、内容が難解だという理由だけではありません。aチシキだけでなく、人生の経験も十分でなく、読み終えることができないからです。難しいからではなく、自分のなかにその言葉と向き合う準備がまだできていないからです。そういう言葉に出会ってほしいのです。

そうした経験を重ねていくと、十年かけても「読み終わらない本」にも出会えます。私もナンサツかそうした本に出会うことができました。「読み終わらない本」とは読みつくせない本でもあります。②読み終えることができないからこそ、深く交わる意味があるともいえます。

「読む」とは、誰かの書いたことをなぞる行為ではありません。「書く」ということも、言葉に「いのち」を与える行為ですが、「読む」という行為もまた、言葉に「いのち」を吹き込むことです。

人が一生懸命書いた手紙を一生懸命読めば、そこに「いのち」が湧く。人が一生懸命書いた手紙をいい加減に読めば、そこに「いのち」が湧くわけがありません。

たとえば、私が皆さんが書いたものを適当に読めば、そこからは何も生まれません。でも、皆さんが書いたものを、ある熱情をもって読めば、必ずそこには何かが生まれます。

③「書く」にも同じことがいえます。そこに書かれた文章のうまい、下手はあまり関係がないのです。問題は、そこにそれだけの「いのち」が注がれているかです。

言葉は、誰がいつ使っても同じものではありません。誰に向けて言葉を届けるかによって、決定的に変わるものです。言葉とは、皆さんがどのようにそれを使うかによって、はたらきを変えるものなのです。

この授業をとおして、皆さんと探してみたいと思っているのは「言葉の種子」です。それは「意味の種子」といってもよいかもしれません。

種は、黒くて小さい。C、ふだんはまったく目に入りません。本当に凝視ぎようししないと種を見つけて。Cヒロウことはできません。^④でも大事なもののというのは、黒くて小さくて、道端みちばたに落ちているものなんだということをお伝えしたいんです。

皆さんは最近、道などで種をヒロったことがありますか。D小さい頃はあるかもしれない。私も小さい頃はよく種をヒロって家に持ち帰りました。何かとても惹ひかれるものがあったのだと思います。でも今は、そうしたことはしません。

でも、そのカdわり、人生のタeビジでは、言葉の種子、意味の種子をずっと探しているような気がします。多くの人が通り過ぎた言葉の道で、しゃがみこんで何かを探している、そんな自分がいます。

目立つ花が咲いていれば、見つけやすいでしょう。でも本当に大事なものは、しばしば種子の形をしている。このことを覚えておいてほしいのです。

皆さんには、種子を見つけるだけでなく、それを自分の心のなかに植え、育ててほしいのです。

種子に必要なのは、「土壌どじよう」と「光」と「水」です。ここでいう「土壌」は心です。さらにいえば「i」です。「光」は、皆さんが苦しみや悲しみの彼方かなたに見出していく小さな希望です。「水」は汗ともいえるのですが、やはりiiです。

涙というのは面白い字で、「シ（さんずい）」に「戻る」と書きます。私たちを自分のあるべき場所へ戻してくれるのが、涙の働きなのです。

私たちは、何に対しても涙でできるわけではありません。自分の本当に大事なものが傷ついた、傷つけられたり、自分の愛する人を失ったときに涙が出る。

桃栗 ア 年柿 イ 年という言葉があります。 ア 年なり イ 年なりかかって、
やっとなんかが実るということです。ですので、皆さんも焦らなくていいので、^⑤自分の種をしっ
かり見つけて、投げ出さないことが大切です。

(若松英輔『14歳の教室 どう読みどう生きるか』)

問一 ―― 部 a・e のカタカナを漢字に直して答えなさい。

問二 空らん A D にあてはまる言葉としてふさわしいものを、次のア～キの中か
ら一つずつ選び、記号で答えなさい。同じ記号は二度選べません。

ア なぜなら イ だから ウ たとえば エ でも
オ あるいは カ もちろん キ もしかしたら

問三 空らん ※ には、体の一部を表す言葉が入ります。漢字一字で答えなさい。

問四 空らん i、 ii にあてはまる言葉を、本文中からそれぞれ抜き出して答えな
さい。 i はひらがな三字、 ii は漢字一字の言葉が入ります。

問五 空らん ア、 イ にあてはまる数字を、漢数字で答えなさい。

問六 ―― 部①「『深く』読める本」とありますが、それはどのような本ですか。その内容が
書かれている部分を三十六字で探し、初めの五字を抜き出して答えなさい。

問七 ―― 部②「読み終わることができない」とありますが、それはなぜですか。その理由
が書かれている部分を二十八字で探し、初めの五字を抜き出して答えなさい。

問八 ―― 部③「『書く』にも同じことがいえます」とありますが、「書く」は「読む」と、
どのような点で「同じ」ですか。本文中の言葉を用いて三十字以上四十字以内で、説明し
なさい。

問九 ―― 部④「でも大事なものであるのは、黒くて小さくて、道端^{みちばた}に落ちているものなんだ」とありますが、「黒くて小さくて、道端に落ちているもの」とはどういうもののことを指していますか。「ふだん」と「意識」の両方の言葉を必ず使って、くわしく説明しなさい。

問十 ―― 部⑤「自分の種をしっかりと見つけて、投げ出さないことが大切です」とありますが、それはどういうことですか。その内容としてもっともふさわしいものを、次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア 野菜などの種はまくだけでなく、きちんと水を与えて育てることで、おいしい実をつけるということ。

イ 歩きながら周りをキョロキョロ見ること、実はお金になりそうな大切なものを発見できるということ。

ウ 自分の言葉の土台となる感性や考え方、価値観をじっくり深めていくことが不可欠であるということ。

エ 自分自身のことをしっかりと他人に理解してもらうためには、コミュニケーションが大切であるということ。

二

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

中学二年生の花香は、小学生の頃には水泳で全国でもトップクラスの記録を持つ選手だった。しかし、自転車の事故で膝^{ひざ}をけがしてしまったことをきっかけに泳ぐことから遠ざかり、ある晩姿を消してしまった。何とか競技を再開してほしいと願う「僕」は花香の居場所を見つけ出し、説得しようとする。

「どうしていいか分からないの」

僕は【A】息を呑^のんだ。痛^{※1}む膝をかばって立ち上がり、横^{こし}に腰を下ろす。月の光がプールの水面を照らした。

「膝が痛い辛い^{つら}な。ここまで自転車で来るの、大変だったよ。でもお前の膝は治^ちってるんだろう？」 深見^{※2}さんがそう言^いってた」

花香がスタート台から降りて屈^{かが}みこみ、指先を水につけた。手首^{ひた}まで浸^{ひた}したところで、^①まるで熱湯に触れてしまったように慌^{あわ}てて手を引き抜く。

「無理よ」

「じゃあ、何でここに來^きたんだ」

「分からない」

「泳^{およ}ぎたいんじゃないのか」

のろのろと顔を上げる。今にも泣き出しそうに顔が歪^{ゆが}んでいた。また水に手をつけ、今度はもう少し長くそうしていた。水をかき回す手が歪^{ゆが}んで見える。立ち上がり、スタート台に立つと、裸足^{はだし}の爪先^{つまさき}が台の先端^{せんたん}を掴^{つか}むように【B】曲^まがった。背中^{せなか}の筋肉が盛り上がり、今にも飛びこみそうに見える——だが、そこまでだった。溜息^{ためいき}をついてスタート台から降りると、右膝をかばうように手を添^そえる。体^{しほ}が萎^{しぼ}み、肩^{かた}が震^{ふる}えだした。

^②彼女の心の底^{うす}に渦巻くものを、僕は必死で感じ取ろうとした。膝は治^ちっているはずだ。何を考えたのかは分からないけど、半年のブランクの後、たった一回泳いだけで投げ出してしま^{まう}のは、あまりにも情けなくないだろうか。ふだんの強気な態度を考えれば、どうにも彼女

らしくない。

花香はそのまましばらく【C】していたが、突然背筋を伸ばし、助走をつけていきなりプールに飛びこんだ。僕は慌てて身を乗り出した。服が邪魔じゃまになっているはずなのに、悠然ゆうぜんとクロールで突き進み始める。僕は水泳に関してほとんど素人しらうとだけど、そのフォームが無駄なく綺麗なものであることぐらいは分かった。何だよ、やっぱり治ってるじゃないか。プールサイドに回りこみ、彼女と並んで走った。五十メートルを泳ぎきった花香がスタート台に手をかける。体を持ち上げようとして手が滑り、背中から水に落ちた。

笑ってしまった。

「何よ」花香が僕を睨にらみつける。濡れた髪が額に張りつき、息が荒くなっている。

「ちゃんと泳げるじゃないか」

「違うの。こんなの、^③私の泳ぎじゃない」

「分かんねえな。何だよ、それ」

「ただ泳ぐだけなら誰でもできるでしょう。あんただって泳げるぐらいなんだから。でも、私の泳ぎは、そういうのとは違う……分かんないでしょう、こんなこと言っても」

「いや」何となく分かった。一流の選手は、みんなこんな感じなのだろう。

「勝つことの面白さが分かってきて、そのためなら何でも犠牲ぎせいにしてもいいって思ってた。でも、こんなんじゃないでしょうもないのよ。怪我けがしてから初めて水に入った時、全然違ったから。ショックだった。それまでは、泳ぐことなんて歩くのと同じだったのに、水が凄く重くて、全然前に進まなかった」

「それで泳ぐのをやめちゃったのか？　ずいぶん諦めあきらが早いんだな」

「半年泳がないだけだったのに、全部忘れてた……私、四歳の時から何年も泳いできたのよ。一日何時間もね。それでやっと、突き抜けるような感覚が分かってきたのに」

「突き抜ける？」

「水の抵抗ていこうがなくなつて、逆に後ろから水に押されるような感じ。それが全部消えちゃって、泳いでも苦しいだけだった。何年もかけてやっと体で覚えたのに。それを取り戻せるかどうか……ずっと積み重ねてきたものを、あんな馬鹿な事故でなくしちゃったのよ」

花香が、燃え上がるような目つきで僕を睨^{にら}んだ。顔を水につける——^④炎と水がぶつかり合
い、炎が勝った。ざぶりと体を沈^{しず}めると、水の中から僕を見上げる。揺^ゆれる水の中で、しつか
りと炎が燃えていた。レベルが高いが故^{ゆえ}に、花香はもどかしさに身悶^{みもだ}えしたのだ。言うことを
きかない体。失われる技術。だけど、水泳選手としての彼女は死んでいない。自暴^{やけ}になったつ
もりで、自分の力にまだすがっている。彼女の目に宿った炎は、超一流の選手だけが持つ本能
の光なのだ。

^⑤誰かが背中を押してやりさえすれば。

花香が顔を上げ、両手で水をぬぐった。目が真っ赤になっている。

「もういいでしょう？ 放^{はな}っておいてよ、お願いだから」

「ちよっと待てよ。二回目だったら、もっと早いんじゃないか」

「え?」

「四歳から始めて、ジュニア記録を出したのが十一歳の時だろう？ 七年かかってるんだよ

な。でも、一度やったことだから、今度はもっと早くできるんじゃないか。それに、これから
七年経ってもまだ二十一歳だぜ」

花香がうつむき、顎^{あご}を水につけた。

「今井?」

顔を上げた花香の目には、まだ炎が浮かんでいる。だけどそれは憎^{にく}しみや悔^くしさが燃やす炎
ではなく、自信、あるいは闘志^{とうし}の表れのようなだった。彼女が小さな笑みを浮かべる。笑みのよ
うなものを。

「手、貸してくれる?」

僕は膝の痛みを我慢しながらプールサイドにしゃがみこんで手を伸ばし、濡れて冷たくなっ
た花香の手をつかんだ。ぐっと力を入れる——彼女の方が力が強い。思わず引っ張りこまれ、
頭から水に突っこんだ。渦^{※4}に巻きこまれた時のことを思い出し、一瞬恐怖が走る。鼻に水が入
り、水中で咳^せきこみそうになった。擦^すりむいた左腕に水がしみて鋭^{すどど}い痛みが走る。慌てて水を
かき、水面から顔を突き出したところで気づいた。このプールは何とか足が着く。

「ひでえな」顔を両手で擦^{こす}りながら、睨^{にら}みつけた。

「ごめん、ごめん」こらえきれずに花香が笑い声を上げる。急に真顔になり、右手を伸ばして水面を撫でるようにした。「勝手にプール開きしちゃったね」

「誰も見てないし、いいんじゃないか」

花香が首を巡らせてプールを見回す。

「このプール、そんなに悪くないわね」

「そうか」

「しばらくここで練習しようかな」

「しばらくって？」

「来年の三月まで。それ以上ここにはいられないから——たぶん」

すうっと花香が泳ぎだす。優雅なフォームで、無駄な力がまったく入っていない。まるで【D】と同化しているようだった。後に付いて泳ごうか、と一瞬思った。が、追いつけるはずなんかないのだ。彼女ははずれ、^⑥僕の手が届かない場所に行ってしまうだろう。

その一步を今、彼女は踏み出した。もしかしたら彼女の脳裏には、表彰台の真ん中に上がる自分の姿が浮かんでいるのかもしれない。オリーブの冠を頭に載せてもらい、胸に手を当てて「君が代」を聴く場面が鮮やかに見えているのかもしれない。彼女と僕では住む世界が違う。花香は顔を上げて、世界へ出て行く人間なのだ。

あと何か月か経ったら、僕たちは離れ離れになる。何年かしたら、僕の存在なんか、十四歳の夏に染みついた小さな想い出になってしまっただろう。

それでも構わない、と思う。僕の中で彼女が小さな染みになることはないのだから。

(堂場瞬一『少年の輝く海』)

※1 痛む膝…「僕」は花香を探す途中に自転車で転倒し、けがをしてしまったことをさす。

※2 深見さん…花香の水泳の指導者の名前。

※3 悠然…落ち着いて、少しも慌てない様。

※4 渦に巻き込まれた時のこと…「僕」は以前海でおぼれたことがあることをさす。

問一 ―― 部①「まるで熱湯に触れてしまったように慌^{あわ}てて手を引き抜く」とありますが、この時の花香の状態の説明としてもっともふさわしいものを、次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア 自分には泳ぐことはもう無理なのだと思ふことで、プール自体をもきらっている。
イ ゆっくりと水に触れようとしたときに、突然「僕」に声をかけられておどろいている。
ウ 過去にあったつらいことを思い出させ、自分を苦しめているプールをこわがっている。
エ 極限の状態まで自分の内面と向かいあうことで、現実的な感覚さえもわすれている。

問二 空らん【A】―【C】にあてはまる言葉を、次のア～オの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア じつと イ そわそわと ウ そそくさと エ きゅつと オ すつと

問三 ―― 部②「彼女の心の底に渦^{うず}巻くものを、僕は必死で感じ取ろうとした」について、次のそれぞれの問いに答えなさい。

(1)「彼女の心の底に渦巻くもの」とはどのようなものですか。その内容としてふさわしくないものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア もどかしさ イ あせり ウ 怒り エ 無気力

(2)この時の「僕」の気持ちの説明としてもっともふさわしいものを、次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア いつまでも花香が競技に復帰しないことを許すわけにはいかない。
イ なぜ花香がそこまでして泳ぐことを避けているのかを知りたい。
ウ 花香の膝は治っているはずなのにいつまでも痛がる理由を知りたい。
エ いつもの花香の性格をかくしながら泳いでいることがもどかしい。

問四 ―― 部③「私の泳ぎ」とありますが、どのような泳ぎですか。「」を持った泳ぎ」にながるように、本文中から十字で抜き出して答えなさい。

問五 ―― 部④「炎と水がぶつかり合い、炎が勝った」とありますが、この時の花香の説明としてもっともふさわしいものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア 様々な負の感情はわき上がってくるものの、勝負にかける思いを強く持ち続けている。

イ 様々な感情を持ちあわせながら、自分の進むべき道をしっかりと見出だすことができた。

ウ 今の自分の状態は事故のせいだと強く思っており、触れられたくないと思っている。

エ 色々と話しかけてくる僕に対して嫌^{いや}な気になり、どうにかして早く離れようとしている。

問六 ―― 部⑤「誰かが背中を押してやりさえすれば」とありますが、本文中では「僕」のどのような言葉が花香の「背中を押し」しましたか。六十字以上八十字以内で説明しなさい。

問七 【D】にあてはまる言葉を漢字一字で答えなさい。

問八 ―― 部⑥「僕の手が届かない場所」とありますが、どのような場所ですか。説明しなさい。

三

次の各問いに答えなさい。

(1) 次の表①～③は、令和元年度「国語に関する世論調査」(文化庁)の結果の一部です。
表やグラフから読み取れることについて、あとの問いに答えなさい。

表①

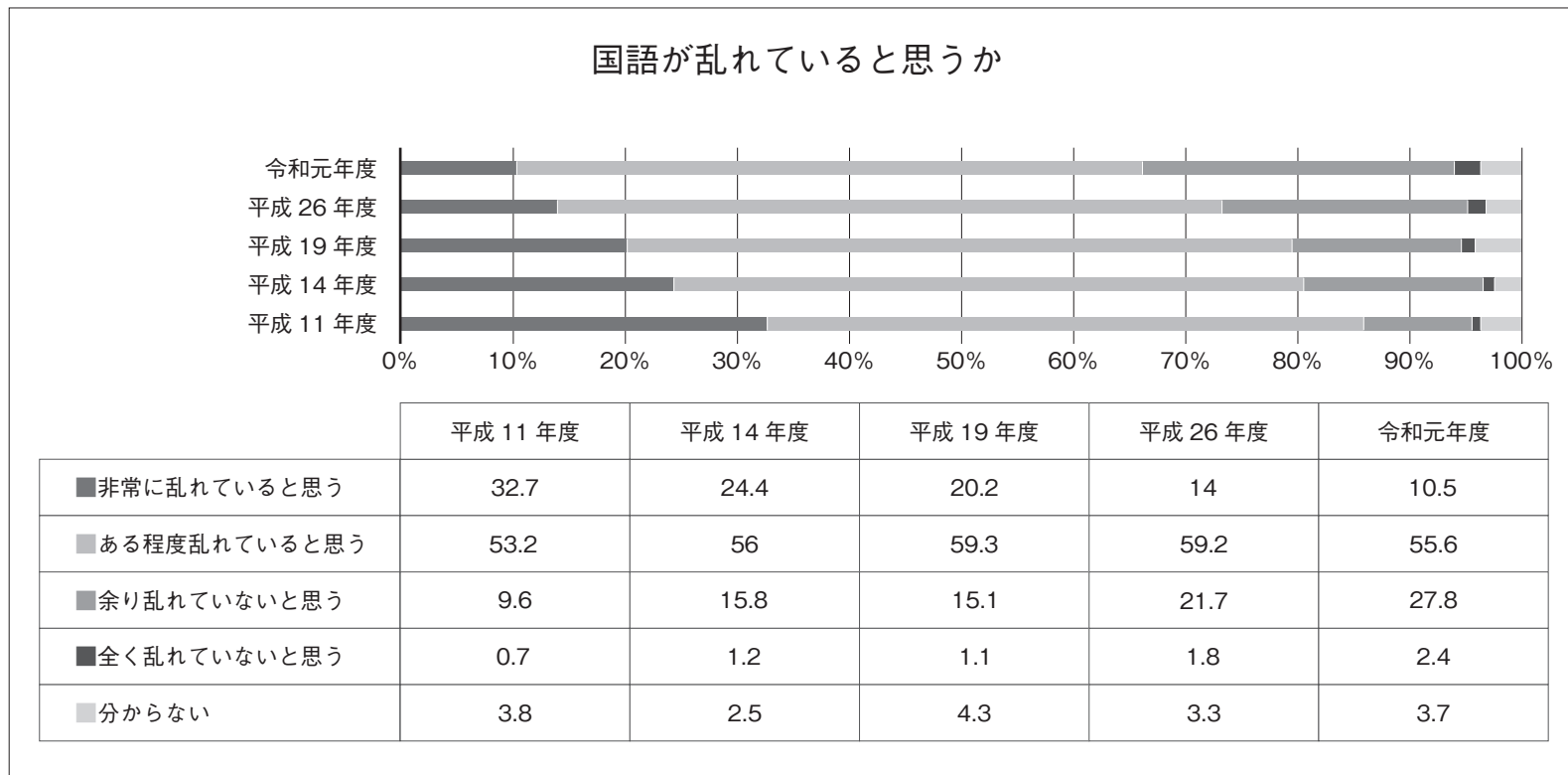


表
②

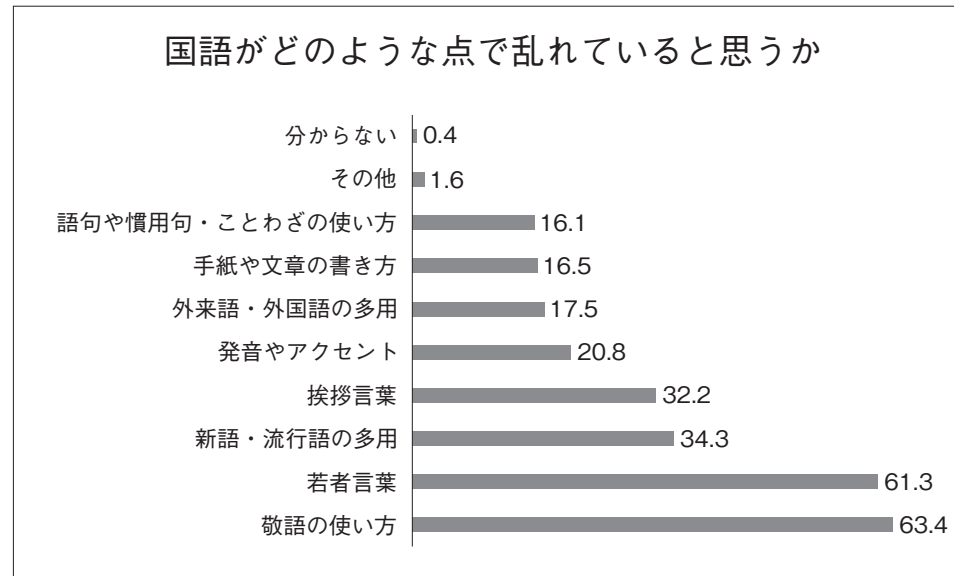


表
③

次の言い方は気になるか

	気になる	気にならない	どちらとも言えない	分からない
(1) 先生は講義がお上手ですね	32.4	62.9	3.3	1.4
(2) 就職はもうお決まりになったのですか	40.5	55.5	3.0	1.1
(3) 誠に申し訳なく、深く反省させていただきます	49.0	48.0	2.3	0.7
(4) 規則でそうなっております	81.5	15.8	1.6	1.1
(5) 昼食はもう頂かれましたか	67.5	29.8	2.1	0.6
(6) お客様が参られています	77.4	20.7	1.3	0.6
(7) お歩きやすい靴を御用意ください	78.0	20.0	1.4	0.6
(8) こちらで待たれてください	81.3	17.2	1.0	0.5

問一 次の解説文に当てはまる言葉を、
 ア、
 ウ、
 エは、表から抜き出し、
 イ、

才、力、キは自身で考えて答えなさい。

「国語が乱れていると思うか」についての調査結果を見ると、乱れていると思っている人の割合がもつとも多いのが **ア** 年度であり、その後は全体的に **イ** 傾向になつているといえる。しかし、依然^{いぜん}として、乱れていると思っている人の割合は、高いままだ。

次に、どのような点で乱れているかを見ると、**ウ** と **エ** を取り上げる人が多かった。特に、**ウ** については、表③でくわしく取り上げている。

表③を見ると、(1)の言い方は、オの人に対する話し方として不適切である。また、(6)について、「参られています」というのは謙讓表現なので、本来は「カ」と言うのが正しい。(8)についても、「待たれてください」ではなく、「キ」と言うのが適切な表現だ。言葉は正しく使いたいものだ。

問二 あなたは、国語が乱れていると思いますか。自分の意見とその理由を、具体例をあげながら、答えなさい。

